

1. はじめに

ツツとナガラはどちらも動作の並行を表す接続助詞である。

- (1) a. テレビを見つつ勉強する。
b. テレビを見ながら勉強する。
- (2) a. 遊びつつ飴を食べる。
b. 遊びながら飴を食べる。

(1)では、「テレビを見る」と「勉強する」という二つの動作が並行して行われていることを表している。同様に(2)では、「遊ぶ」と「飴を食べる」という動作の並行を表している。これらの場合は、ツツ/ナガラのどちらを用いても容認可能である。

しかし、次のような場合には、ツツを用いた場合とナガラを用いた場合で容認性に差がある。

- (3) a. 息子の無実を泣きながら訴える。
b. ??息子の無実を泣きつつ訴える。
- (4) a. 母は電話をしながらお辞儀をする。(その場にいない電話の相手に向かって)
b. ??母は電話をしつつお辞儀をする
- (5) a. テレビを見ながら勉強するな。
b. ??テレビを見つつ勉強するな。

(3)では、「泣く」という動作と息子の無実を「訴える」という動作の並行が表されていると解釈できるが、涙ながらに訴えるという意味ではツツを用いた場合は容認性が低いように感じられる。(4)でも、「電話をする」という動作と「お辞儀をする」という動作の並行が表されているが、電話の相手には見えないにも関わらずお辞儀をするということを表すという点ではやはりツツを用いた場合の方がやや容認性が低いと感じる。また、(5)は(1)の否定命令文であるが、やはりツツを用いた場合の方が容認性が低いようである。

以上の観察から、ツツとナガラの間には何らかの相違点があると考えられる。本研究では、(1)~(5)のような例文について、前後の動詞の性質、慣用的かどうかといった様々な観点から、二つの接続助詞の用法の制限について論じる。また、命令文、受動文などにも観察の範囲を広げて、ツツとナガラの本質的な意味を明らかにしたい。

2. 先行研究

2.1. シテ形とツツ、ナガラ

仁田(1995)では、「シテ形接続」をめぐって、ツツとナガラに関して次のような見解が述べられている。(「シテ形接続」とは、『首を傾げて走る』のように、「二つの動作・状態間の複合的な従属関係を表すもの」奥田(1989))

シテ節は「主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾しており、主節と結びついている」とされている。

- (6) 呆然として彼を見つめた。 [仁田(1995)(17)参照]

(6)において、「呆然として」というシテ節は、主節の「彼を見つめる」という事象の実現の仕方を、その主体の心的なあり方を表現することにより表している。シテ節は主節と結びついているため、シテ節と主節の事象の主体は同一でなければならないし、シテ節の事象と主節の事象は同じ時間の中に存していなければならない。さらにシテ節では、主体がある心的な状態に移行し、その心的状態が存続していることが必要とされる。そして、このように動詞が心的状態の存続を表しうる場合は、ナガラ節に言い換えが可能であるとされる。

- (7) 呆然としながら彼を見つめた。

このように、ナガラ節もシテ節と同様に主たる事象の実現のされ方を限定・修飾する働きを持っており、(6)、(7)のように互いに置き換えが可能な場合もある。しかし、シテ節が用いられるかナガラ節が用いられるかで容認度が異なる場合があり、そこからナガラ節に関する特徴が観察される。

- (8) a. 煙草を吸いながらポスターを眺める。 [仁田(1995)(9)参照]
b. ??煙草を吸ってポスターを眺める。 [仁田(1995)(9')参照]

(8b)は、シテ節の事象と主節の事象は時間的な前後関係にあるということを表しており、動作の並行を表しているのではない。つまり、シテ節では、シテ節の動作「煙草を吸う」の後に生じた結果状態が、主たる事象「ポスターを眺める」の容態的あり方に関わる。これに対してナガラ節では、「煙草を吸う」という動作そのものが、主たる動作「ポスターを眺める」の容態を表しているのである。したがって、「座る」のような変化後の結果状態維持が副次的であり、主体変化を中心とする「姿勢変化」の動詞や、「着る」のような主体運動とともに変化後の対象の状態維持を表す再帰動詞であ

る「着脱」の動詞を用いた場合、副詞などを付加することによって無理に主体運動の局面に焦点を当てたり、あるいは意義の中心を状態維持の運動に置かない限り、ナガラ節では逸脱文になってしまう。

さらにツツ節に関しても同様のことが述べられている。

- (9) 新しいソファに座って話をする。 [仁田(1995)(11)参照]
(10) a. ??新しいソファに座りつつ話をする。
b. ??新しいソファに座りながら話をする。 [仁田(1995)(11)参照]

「ソファに座って話をする」は「ソファに座っている状態で話をする」ことを意味するが、「ソファに座りつつ話をする」はそのような意味であるとは言えない。これは、シテ形が完了的な意味を持ち、「ソファに座った」という行為の結果状態の現存を表すのに対し、ツツ形はこのような完了的な意味を持たないからであるとされている。

ちなみに、先にも述べたように、副詞を付加することなどにより変化後の状態維持に意義の中心が置かれる場合には、ナガラ節の容認度が上がる場合がある。

- (10b) ??新しいソファに座りながら話をする。
(11) 新しいソファにゆったり座りながら話をする。 [仁田(1995)(14)参照]

以上のように、先行研究では、シテ形は完了した動作であるが、ツツ形およびナガラ形についてはそうではないということが示唆されている。しかし、いずれもツツとナガラを直接比較したものではなく、その意味・用法等についてはまだ議論の余地がある。特に、(3)、(4)、(5)の場合はツツとナガラの前の動作が完了しているとは考えにくいので、ツツを用いた場合でもナガラを用いた場合でも容認可能であるはずなのだが、どういふわけかツツを用いた場合に関しては容認性が低いようである。そこでその違いをできるだけ明確に調査・分類し、ツツとナガラの接続助詞としての役割を明らかにしていくことをこの論文の目標としたい。

2.2. 逆接の接続助詞としてのツツ、ナガラ

ツツとナガラはどちらにも、動作の並行を表す接続助詞としての働き以外に、逆接の接続助詞としての働きがある。そこでここでは、逆接の働きをするツツとナガラについての先行研究にも少し触れておきたい。

庵(2001)では、因果関係には複文の前件(P)と後件(Q)の関係が社会通念で予想されるものに反する場合があります、そうした場合を逆接と呼んで次のように詳述し

ている。「Pツツ(も)Q」はPという状況下でQが行われるということを表しており、その働きは「Pナガラ(も)Q」と似てはいるが、ナガラほど話し手の不満などを述べるといった意味合いはないとされる。

- (12) a. 彼女は私たちに気がつかいつつ(も)自分の主張は曲げなかった。
[庵(2001)p425(9)]
b. 彼女は私たちに気がつかいながら(も)自分の主張は曲げなかった。

(12)では、通念上「気がつかって」という前件からは「主張を曲げる」という後件が予想されるが、それに反して「主張を曲げない」という後件が来たために、逆接の意味であると解釈される。また、ツツは客観的に前件と後件を並べるもので、二つのものを対照して述べる対比に近い性質を持つことがあるため、ナガラほど主観的な不満などを表す働きはないものと考えられる。

さらに益岡(1992)では、逆接の表現は、ある自体が成立するのに伴って別の事態も成立すると予想されるのに、実際にはその予想が成り立たないということ、あるいは、ある事態から別の事態が成立するべきだと考えられるのに、その期待が裏切られるということを示すとされている。また、ツツやナガラは状態述語に付いたときは、逆接の表現になるとしている。

- (13) a. 彼はそのことを知っていつつ、隠していた。
b. 彼はそのことを知っていながら、隠していた。 [益岡(1992)p196(60)]

3. ツツとナガラの観察

3.1. ツツもナガラも容認可能な場合

まず、ツツを用いた場合とナガラを用いた場合のどちらも容認性が高い場合について見てみたい。

- (1) a. テレビを見つつ勉強する。
b. テレビを見ながら勉強する。
(2) a. 遊びつつ飴を食べる。
b. 遊びながら飴を食べる。

これらの場合、前後それぞれの動作の独立性が高いことに注目したい。すなわち、(1)において、「テレビを見る」という動作と「勉強する」という動作は並行して行われている二つの動作であり、時間的な前後関係もなく、さらにどちらかの動作が殊更強

く主張されているということもない。(2)においても同様に、「遊ぶ」という動作と「飴を食べる」という動作は並行して行われてはいるものの、どちらの動作も同程度の役割を果たしているように思われる。次の例についても、同様のことが言える。

- (14) a. ご飯を作りつつ洗濯物をたたむ。
b. ご飯を作りながら洗濯物をたたむ。
(15) a. メールをしつつ音楽を聴く。
b. メールをしながら音楽を聴く。

ここで言うところの「動作の独立性が高い」というのは、どちらの動作も同程度に主張されているということである。そして、それぞれの動作が互いに依存していないことを表す。そのため、仮に前件を A、後件を B とし、A ツツ B、A ナガラ B の前後の動詞を入れ替えて、B ツツ A、B ナガラ A としても、同様の意味を持つ文が成り立つのである。

- (14') a. 洗濯物をたたみつつご飯を作る。
b. 洗濯物をたたみながらご飯を作る。
(15') a. 音楽を聴きつつメールをする。
b. 音楽を聴きながらメールをする。

(14)では「ご飯を作る」という動作と「洗濯物をたたむ」という動作、(15)では「メールをする」という動作と「音楽を聴く」という動作は、それぞれ独立した動作である。そのため、結果状態の維持を表すとされるナガラを用いた場合だけでなく、ツツを用いた場合についても容認できるのである。

3.2. ナガラは容認可能だがツツは容認性が低い場合

次に(3)、(4)のように、ナガラを用いた場合が容認可能であるのに対して、ツツを用いた場合の方が容認性が低い場合について考えてみたい。

- (3) a. 息子の無実を泣きながら訴える。
b. ??息子の無実を泣きつつ訴える。
(4) a. 母は電話をしながらお辞儀をする。
b. ??母は電話をしつつお辞儀をする。

先行研究では、ツツもナガラも完了的な意味を持たないため、結果状態の維持を表す

ことは難しいとされており、もし表すことができるとしても、副詞などの変化後の状態維持に焦点をおく働きをもつものが付加される必要があると述べられていた。たしかにナガラの場合には副詞を付加することにより容認度が上がるようである。しかし、(16)のように、たとえ副詞を付加したとしても、ツツを用いた場合に関しては容認性が低いと感じられる。

- (10b) ??新しいソファーに座りながら話をする。
(11) 新しいソファーにゆったり座りながら話をする。
(10a) ??新しいソファーに座りつつ話をする。
(16) ??新しいソファーにゆったり座りつつ話をする。

このことから、ツツに関しては難しいようだが、ナガラを用いた場合に関しては「～している状態で」という表現に転換できる可能性があると考えられる。

- (3') a. 息子の無実を泣いている状態で訴える。
(4') a. 母は電話をしている状態でお辞儀をする。

(3'a)、(4'a)は、(3a)、(4a)に比べると一般的にはあまり使わない表現ではあるが、どちらも容認可能である。

3.3. ツツもナガラも容認性が低い場合

ここでは、ツツ/ナガラのどちらを用いても容認性が低い場合について、いくつか例を挙げて見ていきたい。

- (17) a. ??事故の詳細を知ろうとしつつテレビを見る。
b. ??事故の詳細を知ろうとしながらテレビを見る。
(18) a. ??新聞を読んでいつつコーヒーを飲む。
b. ??新聞を読んでいながらコーヒーを飲む。
(19) a. ??海外に住みつつ日本語を話す。
b. ??海外に住みながら日本語を話す。

(17)では「知ろうとする」という意志形が、(18)では「読んでいる」という進行形が節内に用いられている。また(19)の場合の「住む」という動詞は、この場合「住んでいる」という進行形に近い意味合いの状態動詞である。これらの場合、「動作の並行を

表す」という解釈はできず、むしろこの場合のツツやナガラは、「事故の詳細を知ろうとしながらもテレビを見る」「新聞を読んでいつつもコーヒーを飲む」「海外に住みながらも日本語を話す」といったように、逆接の接続助詞としての役割を果たしていると考えられる。

このことから、動作の並行を表すツツとナガラには、節内の動詞に進行形のような要素を付加する働きがあるものと考えられる。そのため、(18)のように進行形の動詞や、(19)のように進行形に近い状態動詞を節内に用いた場合には、進行形の意味が重複するため、動作の並行を表すのが難しくなったのではないかと考えられる。

3.4. 考察

ここまで3つの場合に分けてツツとナガラについて観察したが、3.1節や3.3節のように、ツツとナガラのどちらにも共通している特徴に関しては比較的明確であるように思う。これは、ツツがナガラの文語的表現であり、その性質がナガラの性質に類似していることによるものだと考える。しかし、3.2節のようにツツとナガラの違いとしては、ナガラを用いた場合には「～している状態で」という表現に転換可能であるという点しか観察できなかった。さらに、(5)で挙げたような命令文や受動文についても観察が及んでいないので、ツツとナガラそれぞれの用法の制限についてさらに考察する必要がある。

そこで以下では、ツツを用いた場合を中心にして、3.2で見たような「ナガラは容認可能だがツツは容認性が低い場合」に特に焦点を当てて観察を進めたい。

4. ツツの特性について

4.1. 独立した動作同士の並行の場合

ここで、3.1節で述べた独立性とはどういうものなのかについて、ここではもう少し詳しく見ていきたい。

- (14) a. ご飯を作りつつ洗濯物をたたむ。
b. ご飯を作りながら洗濯物をたたむ。

3.1節で、(14)はツツとナガラの前後の動作がお互いに独立した動作であるために、それぞれの前後の動詞の入れ替えが可能であることから、ツツを用いた場合もナガラを用いた場合も容認可能であると述べた。この場合で言えば、(14)は「ご飯を作る」という動作と「洗濯物をたたむ」という動作の並行を表しているが、それぞれの動作が目的語 - 動詞という関係から成り立っており、主体は二つの動作を別々に行っているため、それぞれの動詞の関連性はほとんど無いと言ってよい。

- (15) a. メールをしつつ音楽を聴く。
b. メールをしながら音楽を聴く。

同様に3.1節で独立性が高いと述べた(15)も、「メールをする」という動作と「音楽を聴く」という動作はどちらも目的語 - 動詞という関係になっており、動作としてはそれぞれ独立していて関連性がほとんど無い。

このことから、独立性が高いということは、それぞれの動作の関連性が低いため、動作が継続的なものであるかやどちらの動作を先に行っているか、あるいはどちらの動作が長く行われているかということが問題にならないということであると言える。A ツツ B、A ナガラ B を B ツツ A、B ナガラ A という具合に、動詞の前後を入れ替えても容認可能になるのも、このためであると考えられる。

4.2. 付随的な動作を表す場合

3.2節の(3)、(4)の例でも見たように、一見動作の並行を表しているようでも、ナガラを用いた文に比べるとツツを用いた文の方が容認性が低い場合がある。

- (3) a. 息子の無実を泣きながら訴える。
b. ??息子の無実を泣きつつ訴える。

(3)では、「泣く」という動作と「訴える」という動作の並行を表しているが、たとえば(1)の「テレビを見る」という動作と「勉強する」という動作とは異なり、2つの動作が完全に独立しているとは言い難い。そして、状況として「訴える」という動作は継続的であると言えるが、「泣く」という動作は一時的あるいは断続的である。文の意味としては、継続的である「訴える」という動作の方がより重要で、「泣く」という一時的・断続的な動作に関しては「訴える」という動作を行う上での付随的な動作に過ぎない。

- (4) a. 母は電話をしながらお辞儀をする。
b. ??母は電話をしつつお辞儀をする

同様に(4)でも、「電話をする」という動作と「お辞儀をする」という動作の並行を表しているが、「電話をする」という動作は継続的であり「お辞儀をする」という動作は一時的・断続的であると言える。こちらも重要なのは継続的な「電話をする」という動作で、「お辞儀をする」という動作は、あくまでそれを詳述しているに過ぎない。

さらに言うなら、「お辞儀をする」という動作は、「電話をする」という動作にとって本質的な事柄ではない。同様に、「泣く」という動作も、「訴える」という動作にとって付随的なものである。

(3b)ではツツの後に来る B の動作の方が継続している。それに対し(4b)では(3b)とは逆にツツの前に来る A の動作の方が継続している。しかしこのようなツツの前件の動作であるか後件の動作であるかは別として、継続的な動作、すなわち主たる動作に対して、一時的・断続的な動作が付随的な動作である場合には、ツツを用いると容認性が低くなってしまふのである。

4.3. 本質的な動作を表す場合

しかし、継続的な動作と一時的・断続的な動作の並行を表しており、しかもそれぞれの動詞が独立しているとは考えにくい場合でも、次のようにツツを用いることができる場合がある。

- (20) a. お茶を飲みつつくつろぐ。
b. お茶を飲みながらくつろぐ。
(21) a. 本を声に出しつつ読む。
b. 本を声に出しながら読む。

(20)では、「くつろぐ」という動作が継続的で「お茶を飲む」という動作が断続的、(21)では、「本を読む」という動作が継続的で「声を出す」という動作が断続的であると考えられるが、(3b)や(4b)に比べるとツツを用いた場合の容認性が高い。

これらの例が(3b)や(4b)と異なるのは、断続的な動作は継続的な動作とより深い関連があり、付随的な働きというよりもむしろ、継続的な動作が行われる際の様態を表す根幹的な働きをしているという点である。つまり、「お茶を飲む」という動作が、「くつろぐ」という動作の内容そのものを表しており、そのため「お茶を飲む」と「くつろぐ」ことは切り離せない関係にあるというわけである。このような場合には、ツツを用いることができるのである。

4.4. 逆接になりやすいツツ

4.4.1. 否定形 + ツツ

(23)は、否定のナイを含む文である。

- (22) 相手の目を見つつ話す。
(23) a. ??相手の目を見ないつつ話す。

- b. 相手の目を見ないつつも話す。
c. 相手の目を見られないつつ(も)話す。

(22)は 3.1 節で見た例と同様に、「相手の目を見る」と「話す」という二つの動作の並行関係を表しており、かつ、A ツツ B の動詞の前後の入れ替えが可能である。しかし(23a)のように「見る」という動詞を「見ない」という否定形に置き換えると、とたんに据わりが悪くなってしまふ。

(23b)のようにツツの後に「も」を付けた場合や、(23c)のように不可能 + ツツの場合は、(23a)に比べれば容認度はやや高いように感じる。とはいえこれらはやはり、逆接の接続助詞としてのツツの働き、つまり、「相手の目を見ないけれども話す」という意味合いが強く、動作の並行を表す接続助詞のツツとは異なるようである。このように、否定形 + ツツは容認可能である場合もあるが、その場合には逆接の要素を持つ。

4.4.2. 進行形 + ツツ

3.3 節で見たように、進行形+ツツでは、動作の並行を表すことは難しい。

- (24) a. 新聞を読みつつコーヒーを飲む。
b. ??新聞を読んでいつつコーヒーを飲む。

しかし、次のような状態動詞を用いた場合にはやや容認度が高くなる。

- (25) 太ると分かっていつつ食べる。
(26) 物足りないと感じていつつ我慢する。

これらは慣用的な表現として用いられているようにも思われるが、(19a)でも見たようにやはり逆接の意味合いが強いようである。(19a)ではそもそも「海外に住む」と「日本語を話す」という相反することがらが結び付けられているため逆接にとられやすいと考えられるかもしれないが、次のような場合にもツツはやはり動作の並行というよりは逆接の働きをしているようである。

- (19') a. 海外に住みつつ外国語を話す。
(花子はフランスに住んでいるのに英語を話している。)

4.5. ~ツツある

ツツを含む表現として比較的多く見られるものに、「~ツツある」という慣用的な

表現がある。これによって、ツツの前の動詞の表す動作が継続中または進行中であることを表すとされている。

(27) 世の中の価値観が変わりつつある。

(27)の例は、「変わる」という動作が進行中であり、それと「ある（存在している）」という動作との並行をツツが表していると解釈できる。しかし、この場合の主体となっているのは「価値観」であり、実際に動作をする「人、動物」ではない。また、この場合の「ある」の主体は「価値観」ではなく「価値観が変わる（という状況）」なので、ツツの前の動作と後の動作とでは、主体となるものがかなり違うようである。

2章で見たシテ形接続に基づくツツに関する先行研究によると、シテ節と主節の事象の主体は同一でなければならぬため、シテ節から言い換え可能なツツ節に関してもツツの前後では主体は同一であるべきだと考える。現に主語が人である場合は、動作の並行とは一人の人物が行うものなので、ツツの前後で主体が変化することはなかった。

そういった意味ではこの「～ツツある」という表現は少し例外的ではあるかも知れないが、「価値観が変わる」という変化後の状態維持をも表していると考えられるし、動詞の表す事象の並行という観点から見れば「～ツツある」も動作の並行を表すツツの働きの一つであるとしてもいいのではないかと思う。

4.6. 考察

ここまでツツの特性について観察してきたが、ツツを用いると容認性が低いと感じる場合、二つの動作の間で時間的な包含関係が成り立っていることが多い。

(28) a. 自転車に乗りながら叫ぶ。
b. ??自転車に乗りつつ叫ぶ。

4.2節では、ツツを用いると容認性が低くなるのは、継続的な動作と一時的・断続的な動作が付随的な関係にある場合であるということ述べた。しかし、さらに、(28)のように「叫ぶ」という動作を行っている時には必ず「自転車に乗る」という動作を行っていないといけないというように、継続的な動作の中に一時的・断続的な動作が完全に含まれる場合には、よりその容認性が低くなるのではないだろうか。

5. おわりに

最後に本論文では観察が及ばなかった例についても少し触れておきたい。

(29) = (5)

- a. テレビを見ながら勉強するな。
- b. ??テレビを見つつ勉強するな。

(5)の否定命令文は、1章でも述べたように、どうやらツツを用いた場合の容認性が低いようである。その要因についてまでは考察が及ばなかったが、おそらく、ツツと「～するな」という表現そのものの相性が悪いためではないかと考えている。

本稿では、ツツを中心として、動作の並行を表す接続助詞ツツとナガラの性質について観察を進めてきた。その結果、先行研究よりも直接的に両者を比較した例について考察できたと思う。ツツに関しては、ナガラの文語的表現であることにほぼ間違いないという印象を受け、また、文の容認性に個人差はあるかもしれないが、両者にはかなり明確な違いがあると感じた。特にツツの特性については詳細に論じ、その用法の制限についても明らかにした。そして、ナガラの方が文語的であるツツよりも柔軟な性質を持ち、ツツに比べると慣用的な文語表現以外では容認性が高いということが分かった。

より多くの例文を観察し、更なる用法の細分化を行うことが今後の課題である。

目次

1. はじめに	1
2. 先行研究	2
2.1. シテ形とツツ、ナガラ	2
2.2. 逆接の接続助詞としてのツツ、ナガラ	3
3. ツツとナガラの観察	4
3.1. ツツもナガラも容認可能な場合	4
3.2. ナガラは容認可能だがツツは容認性が低い場合	5
3.3. ツツもナガラも容認性が低い場合	6
3.4. 考察	7
4. ツツの特性について	7
4.1. 独立した動作同士の並行の場合	7
4.2. 付随的な動作を表す場合	8
4.3. 本質的な動作を表す場合	9
4.4. 逆接になりやすいツツ	9
4.4.1. 否定形 + ツツ	9
4.4.2. 進行形 + ツツ	10
4.5. ~ ツツある	10
4.6. 考察	11
5. おわりに	11